

## 特別展記念講演会

会期中の11月11日（日）、西南学院大学教授・九州大学名誉教授の丸山雍成先生をお招きして、当館講座室にて、『江戸時代の「みち」と旅—豊前・豊後の大名と民衆を中心に』の演題で、約2時間にわたりご講演いただきました。

講演会では、交通の概念が単に人や物が移動するという意味だけでなく、通信や情報、政治・経済・文化的交流まで視野に入れて捉えられている現状に触れた上で、古代から江戸時代までの交通路の変遷について以下のようなことが述べられました。

古代では、律令制のもと国家的な道＝官道（直線的で幅10～20mにもおよぶ）が造られ、それは都または国府間を結ぶ駅路と国府と郡衙を結ぶ伝馬路からなること（その交通制度を駅伝制と総称）。それが荘園制の広がりや武士の成長・発展ともなって次第に浸食されていき、代って中世では、地域の豪族の住居に向けて狭く曲がりくねった道が形成されていくこと。しかし、戦国大名の段階になると、本城と支城との間を結ぶ交通体系が新たに築かれ、その交通路の重要な所には宿駅を設け、古代の伝馬制に似た伝馬制が行われるようになり、その後、全国を統一した豊臣秀吉がこの伝馬制を全国的なものにし、古代の駅制を復元するかたちで宿駅制を施行。さらに徳川家康が、天正18年（1590）の江戸城入城以来、関東領国内で築き上げた交通体系「ミニ五街道」を基軸にして、関ヶ原の戦いや大坂冬・夏の陣の勝利を契機にこれを再編成していったこと。こうして徳川氏によって整備されていった五街道とその延長である脇街道は、概ね前者に親藩・譜代の大名の領地や天領が多く、後者では外様大名の領地が多いという状況がみられ、幕府がそうした街道の人手や馬の運賃に差異（東海道を最高に天領、譜代藩、外様藩の順）を設けて、諸大名を財政的にリモート・コントロールしていた一面を述べられました。

また、参勤交代について、その原初的な形態が鎌倉



幕府の行った鎌倉番役・京都大番役に求められること。室町幕府はこれとは逆に全国の守護大名を京に集めて中央集権的な政策をすすめ、地方の守護大名もこれを真似て家臣たちの集住をはかるが、一方で、集住しない者に対して参勤交代を行わせていったこと。戦国大名の段階になると、参勤交代制は領内において一応の完成を見、これを踏まえて秀吉や家康が一クラス上の全国の大名に対して参勤交代を行わせたこと。大名の領内で出来上がった参勤交代制は、江戸時代も依然として維持され、大名が将軍に対して行うのと同じような事がここでも行われ、こうした儀礼が社会の上から下までヒエラルヒーを築いて行われていったことが指摘されました。また、江戸幕府による参勤交代制度の始期の問題やその実体について豊後日出藩や臼杵藩の事例などをあげて話がなされました。

さらに九州および豊前・豊後の街道について話が進められ、その特色や、九州における庶民の旅の有様、また「慶安の御触書」にみる女性の旅を禁じた内容と実体との違いや、御触書そのものが後世（天明2・1782年を遡らない）の創作との指摘もなされました。多岐にわたった講演の内容に、聴講された方々は大変興味深く聞き入っていました。

### ● 編集後記

今年の干支である馬が、交通運輸・情報伝達の手段として、人類の生活に大きな役割を果たしていたのはいつのことやら、近代の機械文明の急激な発達には馬による交通運輸にとってかわってしまい、最近ではコンピューターやI.T.なるもので簡単にさまざまな情報が得られる世の中になってきている。情報の波が次々に押しよせている現代、私と同様に“馬の耳に念仏”状態の人も多いのでは… (T.N)

資料館ニュース No.57

発行 2002.1.31

大分市歴史資料館

大分市大字国分960番地の1  
〒870-0864 ☎(097)549-0880



江戸浅草下谷上野谷中湯島本郷輸入染井園（中根 忠之蔵）

## 江戸紀行一名所・名物・旅模様

会期 10月26日(金)～11月25日(日)

平成13年度の秋季特別展として「江戸紀行一名所・名物・旅模様」を10月26日(金)～11月25日(日)の27日間にわたって開催しました。

本特別展では、郷土の参勤交代や旅日記などの史料をもとに、江戸時代の郷土の人々が目にしたであろう各地の名所や名物、また旅の様子などを、屏風や絵図、錦絵や名所図会、御座船や名物の復元模型などの資料を通して紹介しました。



会期中の11月18日(日)には、西南学院大学教授で九州大学名誉教授でもられる丸山雍成先生をお招きし、『江戸時代の「みち」と旅—豊前・豊後の大名と民衆を中心に』の演題でご講演いただきました。

現代の旅との違いや、こんにちの旅の環境が江戸時代にかたちづくられた事や、道の歴史などを振り返るためのよい機会になったのではないかと思います。



### ●表紙紹介(特別展展示品)

## 江戸浅草下谷上野谷中湯島本郷駒入染井図(新板江戸外絵図)

地図作家で知られる遠近道印(本名藤井半知)と経師屋加兵衛によって寛文11年(1671)11月に刊行された江戸の市街図。現在の東京都台東区・文京区あたりを描いたもので、図のほぼ中央部分には不忍池も描かれています。本図は、この前年に道印らが出版した「新板江戸大絵図」に次いで刊行された「新板江戸外絵図」4枚の一枚にあたるもので、正確な方位と1分5間の縮尺(1分=約3mm、1間=6尺5寸=約1.95m、縮尺3250分の1)でつくられたこれら一連の絵図は、以後出版された江戸図の模範となったといえます。图中右下部分には、当時府内藩主であった松平左近将監忠昭(「松平将監」)の

屋敷もみることができます。



(木版手彩、125×162cm)

## 江戸時代の東海道および九州の旅を紹介

「江戸紀行一名所・名物・旅模様」の展示会では、大きく、Ⅰ. 江戸への道、Ⅱ. 街道の風景、Ⅲ. 大名の旅、Ⅳ. 庶民の旅、Ⅴ. 九州の名所—長崎、Ⅵ. 豊後路への誘い、の6つのコーナーを設けて、大名から庶民にいたる様々な江戸時代の旅の有様を紹介しました。

Ⅰ. 江戸への道では、慶長6年(1601)東海道の宿駅制度制定にはじまる江戸を中心とした幕府の道路網整備の歴史を紹介し、とくに最も重要な幹線道路とされた東海道について、宿場や往来する人々の様子などを屏風や絵巻でご覧いただきました。また、旅人が目にした江戸の風景を江戸図や錦絵・名所図会などから紹介しました。

Ⅱ. 街道の風景では、風景版画家の第一人者として知られた初代歌川広重の「狂歌入東海道」(全56枚)、および遠近道印(藤井半知)と浮世絵の祖ともいわれる菱川師宣の合作による「東海道分間絵図」(全5帖)を展示し、東海道の各宿場の風景をご覧いただきました。

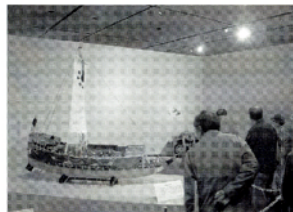
Ⅲ. 大名の旅では、郷土大分に関わる豊後府内藩

と肥後細川藩を取り上げ、その参勤交代の有様を絵巻や絵図・記録などをもとに紹介しました。

Ⅳ. 庶民の旅では、郷土の伊勢参宮の記録をもとに、当時の庶民の旅について錦絵や名所図会の資料を交えて紹介。また、伊勢参宮とともに旅の目的地として人気の高かった四国の金毘羅参りについて併せて紹介しました。さらにこのコーナーでは、江戸時代の旅の道具や当時の旅館組合である「講」、また東海道の名物などについても紹介しました。

Ⅴ. 九州の名所—長崎では、江戸時代の日本で唯一西洋・中国の文物や異国情緒に触れることのできた長崎をとりあげ、府内藩との関わりや同地へ赴いた役人たちが目にした長崎の光景を錦絵や絵図で紹介。また、そうした旅人たちの当時の土産品である長崎版画やガラス製品などを併せて展示しました。

Ⅵ. 豊後路への誘いでは、豊後を訪れる旅人の目的の一つに湯治があり、幕末頃には別府湾岸の鉄輪・別府・浜脇に多くの温泉宿が設けられ、こうした湯治を兼ねて多くの旅人が豊後路を訪れたことを史料や錦絵・地図などから考察し、紹介しました。





肥前崎陽玉浦風景之図 (長崎市立博物館蔵)

江戸時代日本で唯一、西洋・中国の文物や異国情緒にあふれた場所として多くの人々が訪れた長崎の風景を五雲亭貞秀が描いたもの。図中に「舟津町のしるべに宿りて」とあり、貞秀が実際に現地取材して描いたことがわかる。



伊勢参宮 宮川の渡し (豊橋市二川宿本陣資料館蔵)

初代歌川広重が伊勢神宮への入口である宮川の渡し場の風景を描いたもの。本絵では、同宮への民衆の集団参拝である「お蔭参り」の様子が描かれている。江戸時代の民衆の旅として最も人気の高かったのがこうした伊勢参宮であった。



細川紹邦公初御入部御行列画図 (高森秀任氏蔵)

万延元年(1860)10月、豊後初御入部御行列の熊本に入部する11代藩主細川紹邦一行の行列の様子を描いたもの。総勢800名を超える従者が描かれており、肥後細川藩の参勤交代の有り様がみえてとれる。



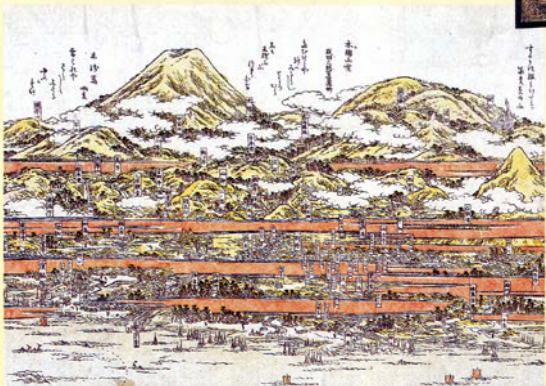
東海道図屏風 (横浜市歴史博物館蔵)

東海道の江戸から京都までの風景を六曲一双の屏風に描いたもの。江戸と京都とを結ぶ大動脈として参勤交代の大名をはじめ、公家や武士・商人など様々な人々が東海道を往来した。人々の往来が頻繁になるにともなって東海道に対する興味や関心も高まり、鑑賞用にこうした屏風絵などが制作されていた。



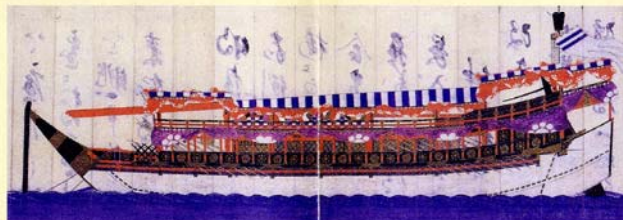
狂歌入東海道 (豊橋市美術博物館蔵)

江戸時代の人々の旅心を掻き立てた初代歌川広重の東海道もののシリーズの一つで、図中には各宿場を詠んだ狂歌が入れられている。本絵では草津宿の名物「姥が餅」の茶店の様子が描かれている。



杵築府内間山水図 (大分市歴史資料館蔵)

杵築城下から府内城下までの別府湾岸の19世紀頃の景観を描いた錦絵。別府近郊では80余にもおよぶ湯屋や「地獄」の名前が記入されている。当時豊後路ではこうした温泉場の湯治を目的に多くの旅人が訪れた。



波奈之丸絵図 (竹内恭子氏蔵 熊本市立熊本博物館寄託)

肥後細川藩の御座船「波奈之丸」を描いたもの。同船ははじめ肥後の川尻におかれたが、寛文年間以降、豊後鶴崎を繁留地とした。肥後藩の参勤交代には、豊後鶴崎経由と豊前大里の二経路があり、そこから兵庫の室津まで海路がとられた。大里経由の場合でも波奈之丸以下の多くの船が鶴崎から回航された。



江戸名所之絵 (中根忠之氏蔵)

江戸の名所・旧跡の繁華をパノラマ風に描いた錦絵。総数260を越える地名や名所が片仮名で書き込まれており、地図としての利用も可能となっている。本図の作者、飯形忠翁は、もと浮世絵師「北尾政美」の名で活躍した人物で、寛政6年(1794)津山藩の御用絵師となり、本図と同じ構図の「江戸一目図屏風」を描き残している。

◎ 資料紹介

とびやま  
飛山横穴墓出土品 ~常設展示で見られなくなる資料②~

丹生川の河口から東に約1kmの国道197号線に接する低丘陵で、昭和47年、国道のバイパス工事にともなって31基の横穴墓が見つかりました。横穴墓には、家形・ドーム形・蒲錐形などさまざまな形がみられ、床面には玉砂利や礫などが敷きつめられました。これらの横穴墓は6世紀後半前後（今からおよそ1450年前）に築造され、その大半が開口されないままの状態であったため、数多くの副葬品が出土しました。メノウや水晶製の勾玉、碧玉製の管玉、水晶製の切子玉、金・銀箔張りの耳環（耳飾り）などの装飾品をはじめ、響や辻金具などの馬具、武器類も数多く出土しています。中でも細かな装飾のされた金銅製の鏡板や杏葉には、華やかに飾られた馬の姿を彷彿とさせられます。350点余り出土した鉄鏃（鉄製の矢じり）は、柳葉や三角形・五角形・斧などの様々な形をしたものがみられ、20点ちかく出土した鉄刀では地下水による錆化が著しく大部分が原形をとどめない状態でしたが、中には細かな透しのある鏃が残る鉄刀もみることが出来ます。その他の出土品では、須恵器や土師器といった器があります。これらは玄室（遺体を置く場所）内や入り口付近でまとまって出土しており、葬儀の際にお供え物などを入れたものといえます。中には時期の新しい土器と古い土器が混っていたり、土器が片付けら



馬具（馬に着ける騎馬用具）



いろいろな形をした鉄鏃と鉄刀



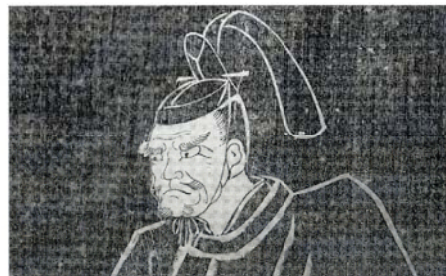
須恵器と土師器

れた状況なども確認され、追葬などで一定期間利用されていたことがうかがえます。

こうした副葬品の内容は他地域の後期古墳と比較して遜色ないものであり、また群集墳と呼ばれる古墳と比べても優れた副葬品を含んでおり、県下最大の前方後円墳をもつ亀塚古墳をはじめ、多くの古墳群が存在するこの海部地域の支配者層を考える上で大変注目されています。

◎ 大分ゆかりの人物1

豊後大友400年の始祖 大友能直



伝大友能直像（竹中・勝光寺蔵）

平安時代末～鎌倉時代初期、鎌倉幕府がおこった頃に幕府の有力御家人として活躍した武将。豊後大友氏初代。京都にて没。鎮西一方奉行（分担して九州を治める役）、さらに豊後守護職等を兼ねていたという説もあります。

生まれ

諸説ありますが、相模国愛甲郡古庄郷（現、神奈川県伊勢原市）の郷司（地方役人）であった近藤能成の子で、源頼朝の有力な側近、中原親能の養子になったという説がもっとも有力です。

養父（中原親能）は大江広元の兄弟で、主に幕府の事務や朝廷とのやり取りを担当し活躍しました。平氏追討の際に各地を転戦し、元暦2年（1185）には豊後に上陸、鎌倉幕府成立後には鎮西奉行にもなっています。

鎌倉幕府と能直

能直は、文治4年（1188）源頼朝から「無双の龍人」（たいへんかわいがられた人）としてとりたてられ、17歳で左近将監となり、翌年、奥州藤原氏征伐の時、頼朝のそばで仕えています。建久5年（1194）、23歳の時、「侍所の着到」（緊急時に武士を集めることに関する役）の控えを命じられています。その後源頼朝、頼家、実朝の公式行事にともに行動し、さらに建保元年（1213）、和田義盛の乱の際には、京都の鎌倉幕府出張所である「六波羅家」（後の六波羅探題）を警備するなど、御家人として鎌倉、

京都の地を中心に多くの足跡を残しました。

大友氏発祥の地

大友氏が起こった土地である能直の領地は相模国足柄郡大友郷（現、神奈川県小田原市東大友、西大友、延清を含む地域と推定）でした。さらに相模国のほかに奥州、豊後、肥後、筑後、鎌倉、京都などの各国に領地があったと記録されています。それら能直の多くの所領は、幕府から与えたもの、養父中原親能から引き継いだもの、在地領主に自分の子供を養子に出す、または領主から寄進を受けるなどにより入手したものでした。

能直と豊後

建久4年（1193）あるいは7年ともいわれる時に、大野郡神角寺山で在地領主である大野九郎泰基を討つ際に能直が一時豊後に入国した可能性はありますが、定住したことはないようです。しかし、養父から引き継いだり、子の能郷を由原宮（現、杵原八幡宮）を本拠とする僧侶の養子とするなどで、現在の大分市、別府市、大野、朝地、安岐、緒方などにおいて多くの土地や役職を手に入れています。

さらに能直亡き後、その子供や孫が多く豊後に土着し、守護職としての地盤が固まり、戦国時代末まで400年にわたる大友氏の豊後支配が続くのです。

